

The Bukkyo Ikikaku News Letter

仏教企画通信

第86号

発行日 令和9年1月1日
発行所 有限会社 仏教企画
〒252-0016
神奈川県相模原市緑区城山 4-2-5
Tel: 042-703-8641 / Fax: 042-782-5117
発行人 藤木隆宣
Email fujiki@water.ocn.ne.jp

現存する最古の仏典とされる『スッタニパータ』から、仏教の原点を学びます。『スッタニパータ』は全部で五つの章から構成されていて、そのうちの第四章の「アッタカ・ヴァッガ（八つの詩句）」が最も早く成立したとみなされています。訳文はこれまでと同じく、中村元『ブツダのことば スッタニパータ』（岩波文庫）から引用していますが、やや堅いかな、古いかな、わかりにくいかななどと感じられる表現は、私の一存で、注釈などを参考に、少し改めています。

今回は「清浄についての八つの詩句」です。それでは、本文を引用します。

「最上で無病の、清らかな人をわたくしは見る。人が全く清らかになるのは教義（見解）による」と、このように考えることを最上と知って、清らかなことを観ずる人は、（教義を、最上の境地に達し得る）智慧であると理解する。

もしも人が教義によって清らかにあり得るのであるならば、あるいはまた人が智識によって苦しみを捨て得るのであるれば、それでは煩惱にとらわれている人が（正しい道以外の）他の方法によっても清められることになるであろう。このように語る人を「偏見ある人」と呼ぶ。

（真の）バラモン（修行を完成した人）は、（正しい道の）ほかには、教義や伝承されてきた学問や戒律や道徳や思想のうちのどれによっても清らかになるとは説かない。かれは禍福に汚されることなく、自我を捨て、この世において（禍福の因を）つくることがない。

前の（師など）を捨てて後の（師など）にたより、煩惱の動揺にふりまわされている人々は、執着をのり超えることがない。かれらは、とらえては、また捨てる。猿が枝をとらえて、また放つようなものである。

みずから道徳や様々な宗教的实践を誓った人は、あれこれ思い悩んで、種々雑多なことを試みる。しかし智慧ゆたかな人は、ヴェーダ（実践的な認識）によって知り、真理を理解して、種々雑多なことを試みたりしない。

かれは、一切の事物について、見たり学んだり思索した

ことを制御し支配している。このように見抜き、覆われることなしにふるまう人を、この世でどうして妄想分別させられようか。

かれらははからいをなすことなく、（何ものかを）特に重んずることなく、「これこそ究極の清らかなことだ」と語ることもない。結ばれた執着の絆を捨て去って、世間の何ものについても欲しいという想いを起こすことがない。

修行を成就した人は、（煩惱の）範囲をのり超えている。かれが何ものかを知りあるいは見ても、執着することがない。かれは欲望にとらわれることなく、また無理に欲望をなくそうと思う欲望にとらわれることもない。かれは（この世ではこれが最上のものである）と固執することもない。

「清浄」は、パーリ語の *suddha*、サンスクリット（梵語）の *suddha* の漢訳語で、悪い行為による過失や煩惱の汚れを離れた状態を意味します。わかりやす

く言えば、「きれい」という意味です。『スッタニパータ』で論じられる初期仏教の修行者は、「梵行」と呼ばれる徹底的な禁欲生活を実践して煩惱を滅却し、身心に究極の清浄を実現すること、つまり身心を「きれい」にすることをめざしていました。

ちなみに、ゴータマ・ブツダの父王の名は、漢訳では「浄飯」と訳されてきました。原語では *Suddhodana*（スッドーナ）もしくは *Suddhodana*（シュッドーナ）です。直訳すると「清浄な飯／きれいな飯」となるので、やや縮めて「浄飯」とされたのです。「清浄な飯／きれいな飯」は「白米」を意味するという説もあります。野生種の米は赤米で、味に難があるとされるので、きれいで美味しい白米は高級な米だったようです。

しかし、時代とともに、清浄の意味や範囲は大きく変容していきます。たとえば、インド仏教の最終到達点というべき密教では、『理趣経』

の「所謂妙適清浄句是菩薩位（いわゆる性愛の快楽は清浄であり、菩薩の境地である *śradhā yathā surata-visuddhi-padam etad yaduta bodhisattva-padam*）」のように、ゴータマ・ブツダが厳禁したはずの煩惱の極み、性愛の快楽すらも、本質的には清浄なのだと言及されています。また、清浄には、「普段は隠されているそのものの本来のすがた、本来の存在意味」という意味もあるそうです。

不染汚の修証

では、曹洞宗では清浄をどう理解してきたのでしょうか。道元禪師が延応元年（一二三九）、興聖寺において説かれた『正法眼蔵』「洗浄」巻に、こうあります。なお、「南嶽山……乃至西天祖師亦如是云云」条の出典は『天聖広燈録八』および『景德伝燈録五』です。

乃至西天祖師亦如是云云。大比丘三千威儀經云、淨身者、洗大小便、剪十指爪。しかあれば、身心これ不染汚なれども、淨身の法あり、心あり。ただ身心をきよむるのみにあらず、国土樹下をもきよむるなり。国土いまだかつて塵穢あらざれども、きよむるは諸仏之所護念なり。仏果にいたりてなほ退せず、廃せざるなり。その宗旨、はかりつくすべきことかたし。作法これ宗旨なり、得道これ作法なり。

以下にまず原文を引用し、次いでわたしの現代語訳を記します。原文は予備知識をもった僧侶が対象の説示ですから、とても簡潔で、意味がわかりにくいところがあります。そこで、わたしの判断で、言葉を適宜おぎなっています。

仏祖の護持しきたれる修証あり、いはゆる不染汚なり。南嶽山観音院大慧禪師、因六祖問、還仮修証不。大慧云、修証不無、染汚即不得。六祖云、只是不染汚、諸仏之所護念。汝亦如是吾亦如是、

釈迦牟尼以来、歴代の祖師たちが護持してきた修証、つまり修行と証悟とは、いわゆる汚れていないこと、つまり清浄である。第七祖の南嶽山観音院大慧禪師に、第六祖の慧能（曹溪大師）が「そもそも修行と証悟は得られるのか」と質問した。大慧は「修行と証悟は無いわけではありませんが、（煩惱や分別によって）汚れてしまつては、修行と証悟は得られません」と答えた。慧能は「たしかに（煩惱や分別によって）汚れていないこと（清浄であること）こそ、諸仏が常に思うところである。あなたもまた同じであり、わたしもまた同じであり、インドの祖師たちもまた同じである」と言った。

比丘の行持すべき所作についての規制と心得を説く『大比丘三千威儀經』に、「淨身とは、大小便を洗ひ、十指の爪を剪ることである」と書かれている。そういうことなので、わたしたちの身心はもと

仏教とは何か 第5回

第5回

最古の仏典『スッタニパータ』から学ぶ仏教

4

清浄について



正木晃

意外かもしれませんが、天童如浄禪師の人物像や思想は鏡島元隆氏をはじめ、佐藤秀隆氏や伊藤秀憲氏などによって研究がかなり進んだ今もなお、確定しているとは言えません。理由の一つは、中国に良質の文献資料が、なぜかく僅かしか残されていないからです。また、生前の語録や法語などを一〇人の弟子たちがまとめた『如浄語録』を読

不汚染の修証と 禪の原点

年余りが経過した。足庵智鑑禪師は如浄禪師に「正しい答えは得られたか」と問うた。如浄禪師はまだ正しい答えを得られなかった。あるとき、足庵智鑑禪師は如浄禪師に「既に『既成の思考や常識から脱すれば、良い方向へ向かうはずだ。』として正しい答えが得られないのか」と言った。これを聞いて、如浄禪師はますます奮励努力し、工夫を凝らした。ある日、忽然として悟りを開いた。足庵智鑑禪師をその自室にたずね、こう申し上げた。「わたくしは正しい答えを得られました」。足庵智鑑禪師は「このたびは正しい答えを得たようだな」と言った。如浄禪師が「汚れていないところを打つ」と言い終わらないうちに、足庵智鑑禪師は如浄禪師を打った。如浄禪師は汗を流しながら、足庵智鑑禪師を礼拝した。足庵智鑑禪師は如浄禪師が悟りを開いたと認めた。

むと、わたしたちが道元禪師の著書を介して親しんできた天童如浄禪師の印象とは必ずしも一致しない点がいくつも見出せます。

このような問題はまだ解決されていませんが、『伝光祿』にしたがう限り、言い換えれば日本曹洞宗の伝統にしたがう限り、「不汚染の修証」を強く提起して道元禪師に伝えたのは、やはり天童如浄禪師ということになります。そして、道元禪師は「不汚染の修証」を確かに継承し、ときに「不会汚染の行持」や「証上の修」と表現し、体系的な思想に整合したのです（何燕生「道元における修証思想の一考察——如浄との比較を通して」）。

ところで、今回、『スッタニパッタ』の「清浄についての八つの詩句」から引用した最後の詩句、「修行を成就した人は、（煩惱の）範圍をのり超えている。かれが何ものかを知りあるいは見ても、執着することがない。かれは欲望にとらわれることなく、また無理に欲望をなくそうと思う欲望にとらわれることもない。かれは（この世ではこれが最上のものである）と固執することもない」について、訳者の中村元が訳注にこう述べています。「理想の修行者は、欲望を離れているのみならず、（欲望を離れている）ということも離れているのである。こういう表現は、後代の空観、または禪僧のさとりを思わせるものがある」。この述懐は、禪の原点が原始仏教にまでさかのぼることを示唆しています。

新刊書籍のご紹介

『百年の密意——輪廻と救い』

楊志鵬 著／川上新二・川上永順 訳
(三〇二六年八月発行)

川上新二

本書は中国の作家、楊志鵬氏が執筆し、『路遥文学獎』に入選した『百年密意』（作家出版社、北京、二〇一七年発行）を翻訳したものです。作者の楊志鵬氏は中国陝西省漢中市の出身で、中国作家協会会員です。チベット高原で12年間の軍隊生活を送った際、仏教に関心を持つようになったとのことです。退役後は青海省や山東省青島市でジャーナリストとして活動し、現在は山東省青島市で作家活動を行い、多数の小説を執筆する一方、実業家としても活躍しています。本書は二〇二四年にフランス語版でも出版されています。

本書の内容は、中華民国期から文化大革命の時期、村での地主となりながら、反革命分子の烙印を押されて死んだ祖父と改革開放30年を経た二〇一〇年代、都会での土地開発ブームに乗って一攫千金を夢見るその孫とを主人公に、彼らと、祖父が若いころに關係を持った同じ山村の大富豪の妻やその曾孫にあたる女性とのかかわりを描きながら、百年に渡って彼らを見守ってきた仏教僧侶も登場させ、三世代続く彼ら、彼女らが負う苦しみは、執着にとらわれたまま輪廻から逃れられないゆえであり、執着を離れて輪廻から解脱することこそが救いとなることを彼らに悟らせるという内容で

す。本書の終盤では仏教説話と孫にかかわる話を交互に描き分けながら、終盤で、それまで描き分けていた祖父と孫の話を輪廻によって結びつけ、僧侶の導きによって孫が執着を離れて輪廻を脱し、平安な生活を見出し、いくという描き方をしています。私としては、祖父を描いた部分は文化大革命に翻弄される村人の姿が、また孫を描いた部分では改革開放期に富を求める業者や役人の姿が描かれていて、それぞれの時代の中国の様子をうかがうことのできる興味深い作品と思っています。さらに仏教にかかわる部分は、中国知識人の一人である作者の仏教（とくにチベット仏教）理解をうかがうことができ、日本人にも関心がもたれるのではないかと思います。

本書で語られている仏教に関する内容を紹介すると、先ず『チベットの死者の書』に基づいた輪廻転生や解脱の考えを指摘することができます。本書では主人公の一人である祖父や、祖父が関係を持った女性、その女性の夫である村の大富豪などの死の場面が描かれますが、そのたびに僧侶が、中有にあるそれぞれの死者に向かって、六道にどうまらず輪廻を脱して解脱するように、もしくは六道にとどまるとしても人間に再生するようにと説きます。この記述にはチベット仏教、とくに『チベットの死者の書』で知られる内容が反映されていると考えられます。その方、私の感想ですが、

僧侶が中有にある死者に向かつて輪廻を脱するように説く場面
で、作者は僧侶に、解説して「山河大地と一体になる」などと語らせていますが、このような表現からは梵我一如の考えが想起されます。また、中有にある死者が雷雨、暴風雨、猛獸、魑魅魍魎など次々と襲ってくる恐怖に囚われて解脱することができない場面では、僧侶は死者に向かつて、それらの恐怖は実在のものではなく、それぞれの死者の心の奥底に潜むもののあらわれに過ぎないので惑わされてはならないと説きます。このような記述からは、唯識の考えが想起されます。

作者は、人は解脱するために、現世にいるときから執着を離れ、自己の心の本性を自覚することが重要であるとして、僧侶に、現世における苦しみは心侶が欲望や執着にとらわれているからであり、苦しみから脱するには欲望や執着を離れなければならない、そのためには心の本性すなわち仏性や覚性を自覚しなければならないと語らせています。そして、自己の仏性や覚性を見出す方法として僧侶は主人公の一人である孫に座禅を指導し、彼は座禅を通じて自己の仏性を見出します。ここには仏性や覚性の考え、それを自ら見出すための座禅の実践が指摘されています。自己の仏性を見出した孫は都会を去って故郷に戻り、自己の利益のためではなく村人のために働き、「生き菩薩」と称される暮らしを送ります。

そのほか本書では因果応報、業報、功德、因縁などの考えや因縁は生滅の繰り返しであるこ

となどとも語られています。

さらに本書の終盤では、僧侶の勧めで五台山を訪れた主人公である孫が文殊菩薩に出会う場面や、往生を迎えた僧侶が孫や村人の眼前で昇天していく様子が描かれています。僧侶が昇天する場面では、天から音楽が聞こえ、僧侶は蓮の形となった白雲に座し、見送る村人は南無阿彌陀仏を唱えます。ここには極楽往生の考えがあらわれています。このような終盤の話から、本書は現代版の仏教靈驗譚ということができます。

また、本書に登場する僧侶は、観音菩薩を奉じていて、家業の繁盛や加護を願う主人公の祖父に「観音菩薩も自分も、現世で人のなりわいを助けることはできない。仏教の教えを説くだけです」と語っていますが、一方で、村人のために薬草や香の天灰を使って病気を治したり、天候の予告をしたりして、村人に重宝がられています。作者は仏教を通じての現世利益的な面も記しています。

本書は、輪廻からの解脱を中心として仏教のさまざまな教えが取り込まれており、作者の仏教理解、現代社会を生きる人々への仏教を通じた作者の主張が盛り込まれた作品です。

15



百年の密意
輪廻と教い
亀岡 繁雄
角川文庫

中国唐代史とオーバーラップする
三代、百年にわたる輪廻の物語
生きることの真実を追った現代中国文学の最高傑作小説！
中国を代表する作家・韓志鴻、初の日本語訳版！

行平 平成出版 定価・2,970円(税込み)

より清浄であるが、身を清める法があり、心を清める法がある。これはただ身心を清めることにとどまらない。国土や自然をも清めるのである。国土は（清浄なものなので）いまだかつて塵に汚れたことはないが、国土を清めるのは諸仏が常に思うところである悟りを開いても退くことなく決して止めはしない。仏教の真髄をきわめつくすことは難しいが、清めるという行為がすなわち仏教の真髄であり、悟りの境地に至るとは清めるという行為そのものである。

原文に「不染汚」と書かれている語を、わたしは「汚れていない」とも「清浄」とも訳しました。不染汚という語は、「汚れていない」ことを意味しますから、「清浄」と言い換えることができるはずです。また、「大比丘三千威儀經云、淨身者」と記されていることも、不染汚を清浄と訳す根拠になります。現に道元禪師は『正法眼蔵』「洗面」巻において、「内外俱淨なる」とき、依報正報、清浄なり（身心ともに清浄となるとき、自分の身心ばかりでなく、自分の住する環境も、ともに清浄となる）」と述べていますから、清浄という語をまったく避けていたわけではありません。

清淨不染汚か

とはいえ、『正法眼蔵』「洗
浄」巻において、慧能が、清
浄ではなく、不染汚と言って



いるとされるのは、なんらかの意図があったとも思えます。不染汚はサンスクリットに戻すと *alīṣa* ですから、清浄の原語の *suddha* とは別の語です。ただし、中国や日本の祖師たちがこの点を把握していたか否か、判然としませんが、重要な事実は、不染汚は曹洞宗ではよく使われてきました。が、禪宗以外の宗派はもとより、同じ禪宗でも臨済宗や黄檗宗では使われてこなかったらしいことです。例証を挙げれば、臨済宗の聖典『臨済録』に、清浄はよく登場しますが、不染汚はまったく登場しません。

ところが、道元禪師は『正法眼蔵』『坐禪儀』巻に、「坐禪は習禪にはあらず、大安楽の法門なり、不染汚の修証なり（坐禪は悟りを得るための手段ではなく、安楽の法門であり、汚れていない修行と証悟そのものである）」と述べています。

同じく「唯仏与仏」巻では「不染汚とは、趣向なく、取舍なからんと、しひていとなみ、趣向にあらざらん処、つくろひするにはあらずなり。いかにも趣向せられず、取舍せられぬ不染汚の有なり（汚れていないとは、なにか特定の目

的をめざさないように心掛けるとか、あれこれ取捨選択しないように心掛けるとか、強いて努力し、なにか特定の目的をめざさないようにすることではない。ごく自然に、特定の目的がめざされず、取捨選択がされない状態こそ、汚れていないということである」と述べています。

これらの用例から、道元禪師は清浄という語よりも不染汚という語の方を重んじていたと思われれます。その理由は、こう考えられます。まず第一に、清浄と言ってしまうと、なにかもあるがままに肯定して、現状に埋没することを可とする傾向が見られれます。それに対し、「不」という否定辭を掲げる不染汚には現状を肯定して安住するのではなく、打破して、新たに具體的な行動を喚起する印象があります。そして、さきほど『理趣經』を例に挙げて指摘したとおり、時代とともに清浄は意味や範圍は大きく変容していきましたから、いわば手垢がたくさん付いてしまっています。

香で清める。それから、また身心を洗い浄めて、また香で身心を清める。このように三回繰り返す。これが仏法の正しい作法なのである。こうすれば、眼と耳と鼻と舌と皮膚と意識という六つの認識器官が更新されることもなく、これら六つの認識器官の対象が更新されることもないにもかかわらず、清浄の功徳はあり眼前に現れる。疑ってはならない。貪りと怒りと愚かさという三毒をまぬがれず、無常を常と、苦を楽と、無我を我と、不浄を浄であると誤解する四倒の状態にあり続けている。でも、清浄の功徳がたちまち眼前に現れるのが、仏法なのである」と述べています。

天童如浄の大悟体験

曹洞宗の歴史において、不染汚ということを強く提起したのは、瑩山禪師の『伝光禄』によると、道元禪師の師であつた天童如浄禪師（一一六二—一二三〇）の語である。

天童如浄の大悟体験

曹洞宗の歴史において、不染汚ということを強く提起したのは、瑩山禪師の『伝光祿』によると、道元禪師の師であつた天童如淨禪師（一一六二／一六三—一二二七／一二二八）が最初のようである。なぜならば、この著作に不染汚、あるいは同義と思われる不会染汚という語がどのように扱われているか、調べてみると、天童如淨禪師の章にのみ、登場するからです。

『伝光祿』は、全部で五十三章から構成され、釈迦牟尼の正法が、第一祖の摩訶迦葉尊者からそのまま第五十四代の瑩山禪師に伝わっていることを証明する著作です。各章は、本則、機縁、拈提（評

釈、頌古（漢詩）の、つごう四項目から構成されています。本則は悟則とも公案ともいわれ、師と弟子が出会って、師資証契し、面授綱法したときの言葉で、仏祖が仏法の根本を悟ったときの公案でもあり各章の主題が提示されています。機縁は行実ともいわれ、弟子が師の導きによって結ばれた因縁であり、仏祖の悟りへと至った行歴が説示されています。拈提は評釈ともいわれ、本則の奥義を解釈するとともに、これを提起して説法することを意味します。頌古は漢詩によって以上を総覧しています。

以下に、「伝光禄せんくわく」から、
天童如浄てんどうにょじやう禪師が雪竇せつぼう山資聖さんしせい
寺（現在の中国浙江省寧波市奉化
区溪口鎮）への住持だった師
の足庵智鑑そくあんちかん禪師から、大悟し
たと認められた経緯の部分（註）
を原文にわたしの現代語訳を添
えて引用します。

足庵智鑑禪師（一〇五一—一九二）は曹洞宗の僧侶でした。雪竇山資聖寺への住持は、淳熙十一年（一一八四）から紹熙二年（一一九一）までの間で、天童如淨禪師が足庵禪師に参禅したのは足庵禪師の最晩年に当たります（佐藤修孝「道元在宋中の参学行程」に関する諸問題（下）」。このとき、天童如淨禪師はおおむね二十歳代の中頃ということになるので、道元禪師が天童如淨禪師に参禅した年代と奇しくも重なります。

從十九歲捨教學。參祖席。投雪竇會。便經一歲。尋常坐禪。

拔群。有時因望淨頭。時寶問曰。不会染汚处。如何淨得。若道得汝充淨頭。師無措。經兩三箇月。猶未道得。有時請師到方丈。問曰。先日因緣道得乎。師擬議。時寶示曰。淨子不会染汚处。如何淨得。師不答。經一歲余。寶又問曰。道得。師未道得。時寶曰。脱旧窠當得便宜。如何不道得。從然師聞得力勵志功夫。一日忽然豁悟。上方丈曰。某甲道得。寶曰。這回道得。師打不染汚处。声未畢。寶即打。師流汗礼拜。寶即許可。

如淨禪師は十九歳から教学を捨てて、雪竇山資聖寺の足庵智鑑禪師の道場で参禅した。足庵智鑑禪師に師事して一年が経過した。その坐禅はいつも抜群であった。あるとき、便所を掃除する浄頭という役職を務めたひと希望したすると、足庵智鑑禪師は如淨禪師に問うた。「これまで一度も汚れていなかったところは、どのようにすれば、きれいにできるのか。もし、答えられらたら、あなたを浄頭にしよう」。如淨禪師はとまどってしまった。二月たっても三月たっても、正しい答えはまだ得られなかった。あるとき足庵智鑑禪師は如淨禪師を自室に招いて「先日因縁は解決したか」と問うた。如淨禪師は答えられず、あたふたしてしまった。あるとき、足庵智鑑禪師は如淨禪師に「これまで一度も汚れていなかったところを、どうやってきれいにするのか」と問うた。如淨禪師は答えられないまま、一

時代と切り結ぶお寺に

福島県長秀院住職

渡辺祥文

墓じまいの流行

「墓じまいをして、永代供養塔への納骨をお願いしたいと思っています」。電話や直接来山しての言葉である。コロナ禍を経て昨年あたりから急増している。当寺だけのことかといえそうですが、近隣や教区の寺院、また他宗派寺院も同じような状況にあると聞いている。これまでも、子供の居住地の関係で墓じまいをして、遺骨をあげて新たに墓地を生活の場の近くに移すことはあった。また永代供養墓は子供のいない家族の安心できるお墓でもあった。

永代供養や永代供養墓は、とても重要で大切なことであり、今の流れであることはわかっている。しかし現場の住職としてこれまでとは違う流れのようなものがあり、あえてこのことについて考えてみたい。

今までとは違うと思うことは、「お墓のことです子供に迷惑をかけたくないで」とか、「お墓について子供と話した

ら、もう維持が大変だから墓じまいしたほうが良いといわれた」とか、継承可能な家庭でも墓じまいを始めたことである。子供たちが地元にならないうちに、お墓を守ることが負担だから、テレビや新聞や雑誌（高齢の親世代）、ネット関係（子供世代）で永代供養・樹木葬・散骨を勧めているからという理由である。テレビ・新聞・雑誌・ネット等は流行に乗っているということなのかもしれない。このことが、

一時の流行なのか、常態化していくのかわからないが、地方の人口の流れを見ると常態化するように思えてならない。かつて宗門の研修会の折などに各地出身の講師から「東北は、日本の中でも最後まで伝統を継承踏襲するところだと思っています」等の言葉を言われていたが、これからは必ずしもそうではないように思う。

地元での笑い話である。寺の役員会がありお茶飲み話となった。「方丈さん、最近高齢化で亡くなる人が多いけど、このうち6年うちの百世帯の町内会で何人に引導渡した

んだい？」（当寺は一村一寺ではなく隣接3町村の中にある。質問したのは寺の所在地の町内会のA役員さんである。）

「えーと、確か16人をお送りしました」

「そうか、そんなになるんだなあ。だから老人会も少なくなったんだなあ」

そのあと、近隣町村で老人会も維持不能という理由で解散が多いという話題に移った。私自身は地元の人口も気になっていたので、町内会の役員でもあるBさんに尋ねた。

「ところで、このうち6年うちの町内で生まれたお子さんは何人でしたか？」

Bさんが即答した。

「0人です。この町内の世帯で、このうち6年間で生まれた子はいません。お盆やお正月に見かけける子は帰省した子供たちの子供、遠くにいる孫やひ孫です。うちの町内もいずれイノシシの数が人口を上まわりますよ」。皆大笑いしたが、厳しい現実である。

地方は人口の多い「団塊の世代」と言われる方々を含めた高齢の方々が地域を支えている。町内会も各種地域団体も各種ボランティアも、神社の役員も、そして寺院の役員も皆この世代が中心となり日常が動いている。今は70歳まで働く人が多くなった。60歳代で地域の役割を担う人がなかなか見いだせなくなった。住職や古老が役員等の就任を依頼しても断られることが多い。また、そもそも地元にいる60歳以下の人がいない。みな都市部で働き生活している。

厳しい時代を生き抜くために

寺院を取り巻く現実には厳しくなっている。コロナ禍がその厳しさに拍車をかけたのは間違いない。しかし一方で、昔から寺院の厳しい状況等が人口動態予測などで言われてきたことも事実である。

今から45年前の思い出である。教化研修所（現総研教化研修部門）在籍時、授業の後の議論中、今も懇意にしていただいている先輩のS師が言った。「あるコンピュータの専門家の話で、いろいろなデータを入力すると、これから21世紀を迎えると伝統寺院は皆消滅してしまうという予想なんだって。何度入力してもそういう予想結果だそうだよ。6人ほどの議論の場であつたが、「21世紀まであと20年ですよ。寺院消滅か……」と驚いたし、可能性はあると20代半ばの自分も思った。PCの黎明期なのでデー



タ不足だったのかもしれないが、今現在まだ寺院は存在しているし活動している。当時から多くの問題点が指摘され、課題も山積していた。それでも地道に時代と切り結びながら教化活動に努めてきた結果だと思ふ。

令和9年（2027年）は東日本大震災・原発事故殉難精霊の十七回忌を迎える。被災地はどこでも同じであるが、そのことについては時が止まっている。つらいことの記憶が圧倒的に勝るが、本当に尊い気持ちもあつた。当寺も震度6強の揺れで境内建物被害を受けた。山内だけでは如何ともできなかったが、放射性物質が降る中それを承知で片付けに役員や篤信の方々が集まって片付けて頂いた。原発事故という状況で「手伝ってください」とは言えない状況であるにもかかわらず自発的に集まってくださった。これは各地の罹災寺院の多くでそうだったのである。

「お寺と神社は大事であり、地域の拠り所だ」と、檀信徒の方々が自宅の片づけを差し置いて集まってくださった。その時感激したことは、「これは自分の力ではない。これは自分たちの力である。地味で、目立たず、時代に翻弄されながらも黙々と使命を果たそうとつとめてきた蓄積なのだ。

明治の開国の時代、諸外国

は日本の庶民の識字率の高さに驚愕したという。ほとんどの人が読み書きできることに驚いたといわれるが、まさに「寺子屋」の教育力であつた。定着させたのは幕府であろうが、担当したのは伝統教団の僧侶たちである。

楽観論などもう言えない。寺院の経済的な状況は厳しくなる。昭和20・40年代、住職も寺族も兼職している人が多かった。いま、またアルバイト等をしてながらお寺を守っている若い僧侶の話を聞いている。後継者不足で兼務も増えている。それでも力と情熱のある人は老健施設を開設したり新しい試みに入っている。身近なことでも各寺院の特色を教化事業に生かそうとしている。写経会も坐禅会もかつてより声がかかろう。学校もかつてより見学学習に来ている。オンラインでの法話や梅花流もYouTube等で、QRコードで開いて見ることができるよう。高齢世代には陳腐で違和感そのものに見えても若者たちの常識であろう。永代供養も大切である。なぜなら申し込む人々は口々に「お寺さんの永代供養なら安心ですよ。だってお寺だったら今まで通りずっとここにありますがものね。私たち安心して永久に眠れますよね」と言うのだ。これも信頼の表明なのだと思ふ。これからの仏教の教えは人間と現代を導くものとなる。曹洞宗の寺院の教化は底力がある。あとは私たち一人ひとりの覚悟と実行力であろう。

なぜ私が文化勲章を授与されたのか 上

新しい妖怪学の提唱から妖怪コスプレという社会現象に至るまで

国際日本文化研究センター名誉教授

小松和彦

佐々木宏幹先生との出会いから

ただ今、紹介していただいた小松和彦でございます。佐々木宏幹先生の法要にあたり、このような場を設けていただきまして、これも先生の与えてくださったチャンスかもしれない。

私は東京都立大学で大学院生を過しましたが、先生はその先輩にあたります。私が院生のとき、先生は学部の非常勤講師としてお見えになっておられたので、学部の授業ですから私は潜りの学生となりますが、よく先生の授業を聞いておりました。授業が終ると、先生のところへ行っ

て、今日の講義はあまだ、こうだと行ったものです。「ああ、弱ったな」というような感じで、頭をかいておられた先生の姿が思い浮かびます。佐々木先生はシャーマニズムの専門家であり、宗教学あるいは宗教人類学に造詣の深い先生でした。私も宗教学や宗教人類学などにかかわる研究をしておりましてから、時折、先生に教えを乞う形で電話をさしあげました。ところが、すぐには出てくれませんが、一度電話を切って、また掛け直します。二度目に出ていただければよいほうでした。今日、先生のお写真を見て、当時のことを思い浮かべながら、私の研究成果のようなものをぜひとも先生にも聞いていただきたいと願っております。

それでは本題に入ります。私は文化勲章を昨年（二〇二五）十一月にいただき

ました。なぜ私に授与されたのか、自分なりに少し考察した話をさせていたいただきたいと思いますが、十月七日だったでしょうが、文科省からの電話で「文化勲章を受けてもらえるか」と言われたときには仰天いたしました。多くの文化勲章受章者は、こう言っているんですけど、高齢の方が多いわけです。一緒に受賞された辻惟雄先生、美術史の先生ですけれど、九十三歳でいらっしやった。それに比べると私ははるかに若い。

これは一体どういうことなのか、いくつか自分なりに振り返ってみて、こういうことだったのではないかと思うところをこれからお話しいたします。文化勲章をいただいた理由という点、文科省から報道関係者に配られた理由書が

あります。その冒頭の部分には、このように書かれています。「民俗学の分野において、民間信仰など学界の注目が低く、埋もれていた日本文化を発掘し、文化人類学の構造的解析手法の導入などにより数多くの学術上の新知見をもたらした、『妖怪』を迷信ではなく人々の心意の反映、すなわち文化として捉え直した学際的総合的な妖怪学の創出や、高知県の物部地域に伝承され、謎とされていた、いざなぎ流を四十年にわたり調査し、実態や変遷を明らかにして、宗教史に位置づけるなどの顕著な功績を挙げ、歴史界の発展に多大な貢献をした」

評価として、三分の二が妖怪学について。三分の一がいざなぎ流についてという記述は、妖怪に関しても、いざなぎ流にしても、まだまだ十分な自分なりの研究成果を挙げているとは思っておりますので、このような評価をいただいて恐縮している次第です。

妖怪は現在も至るところに存在する

私は新しい妖怪学を提唱してきました。私の『妖怪学新考』という本、これは私の妖怪学宣言のようなものでありますが、最近、この本の中国語版の出版が進行しております。そこに、中国版に寄せての文章ということで書いたものが、私の考えをコンパクトに表していると思うので、述



小松和彦氏

べさせていただきます。「妖怪は文化である。（このところが非常に大事なですけれども）それが人間の想像力が生み出した奇妙な、すなわち現実の世界ではあり得ない不思議な姿をした、時には姿形さえも見えない、また時には恐怖さえも与える造形物である。」

妖怪は過去だけではなく、現在も至るところに存在している。神話、伝説の中に、あるいは小説や演劇、絵画、さらには映画、アニメ、ゲーム等の中に。こうした妖怪には自然と人間、社会と人間、あるいは人間と人間の間に生じる喜怒哀楽や善悪感が刻み込まれている。

私たちが説く新しい妖怪学は、妖怪を迷信として葬り去るのではなく、人間の心を映す鏡としてとらえ直し、人間学という大きな枠組みのもと

でさまざまな観点から研究し、妖怪が果たしてきた役割を究め、人間の文化史の欠逸を補い、その成果を新しい文化を生み出す糧としても、広く活用することを目指す学問である。」

というふうにとらえて、中国語版の原著者の言葉といたしました。

ただ、妖怪の研究などといえますと、お化けですかというような批判もいろいろと浴びてきたものです。そんなとき、常に励みにしてきた言葉があります。寺田寅彦さんという、昔の人ですけれども、物理学者であり同時にエッセイストでもありました。彼が「化け物の進化」という大変興味深いエッセーを書いていて、そこに、

「人間文化の進歩の道程において発明され創作されたいろいろな作品の中でも『化け

物』などは最もすぐれた傑作と言わねばなるまい。化け物もやはり人間と自然の接触から生まれた正嫡子であって、その出入する世界は一面には宗教の世界であり、また一面には科学の世界である。同時にまた芸術の世界でもある」というような言い方をしていきます。いろんな側面と化け物は結びつく。化け物というのは通俗的な言葉ですが、われわれ研究者はそれを妖怪と置き直しております。

私の信条――
媒介者、カメであれ、
謎解き

私の研究の信条といったものを、ちょっと恥ずかしいけれども、三つ挙げます。これは私の研究態度ともつながってきますが、研究者は媒介者だということが一つ。いろいろな意味での媒介者だと思っております。もう一つは、私の研究態度はウサギよりもカメ、のろのろとゆっくり進むということです。三つ目、研究しているとき、資料集めなどいろいろやって、あるいはフィールドワークをやっているときは大変つらいこともたくさんありますけれど、結局は謎解きである。そして、謎が解けたときの喜びというのがまた興味深いものがあります。

の中に新たに加えられる。そういう新しい知を、新しい文化を発見して、そして多くの人に共有してもらう、研究というのはそういう謎解きだと思っております。前に挙げた、研究者は媒介者であるということ、簡単に説明しておきますが、研究者は過去と現在、そして現在と未来をつなぐ必要がある。研究センターというのはそういうものになっていかなければいけません。あるいは、一回つないであったはずなのに、途切れてしまったものをもう一回、自分なりにつなぎ直す。線が切れたものをもう一回つないでいく。これは過去と現在という時間だけではなくて、空間軸で、国内のあるいは国外の多くの人々、民族などともそれをつないでいく必要があるだろうと思っております。

さらに言えば、死者と生者、過去というのは死者の世界でもありますけれど、あるいは未来の人たちとの間で、学問的成果というものはつないでいかなければいけません。ただし、こういう考え方をする研究者は意外に少ないです。ね。後ほど、ちょっと批判めいたことを申し上げるかと思います。

もう一つ、先ほど挙げたウサギよりもカメということ。私は大きな謎を解くためには忍耐強く、寄り道しながらも、あるいは迷い道に入りながらも、あるいは時には休み休みしながら、のろのろであつても、あるかないか分からない



佐々木宏幹先生の三回忌法要会場でご講演を拝聴

解を求めて、カメのように歩むことを良しとしてきました。研究してすぐに答えが出ないと駄目だと、例えば今は費用対効果みたいなことを言われて、科研費をもらったらすぐ成果を出せと言われるけれども、人文科学、とりわけ私どものような民俗学や人類学というのは時間がかかります。私の妖怪研究もいざなぎ流の研究も三十年、四十年かかりました。ほとんどはなかなか答えが出るかどうか分からない、探している資料が出るかどうか分からないような状態の中で、のろのろとやってきたものです。幸いにこの年まで生きたおかげで、ある程度の解を得るようなことになっております。

三つ目に、研究は楽しい謎解きということ。研究者はお

そらく問題の設定とか課題とか、硬い言葉で表現しますが、結局、私は謎解きだと思っております。まだ誰も解けないような謎を解いていくことに喜びを見いだす。時間をかけても解けない場合も、ほとんどあきらめざるを得ないようなものもあります。それでも、とにかく挑戦して突き詰めていく。いろいろ研究課題はありますが、あまりいろんなものを渡り歩くよりも、いくつかテーマを決めて突き詰めていく。突き詰めた結果、幸いにして誰かが評価してくれたのでしょう、文化勲章をいただいたというふうに思っております。

いざなぎ流と
ミクロネシアの伝説研究

私の研究生活は二つに分けることができます。一つは個人研究時代です。簡単に結論を言ってしまうと、個人研究をいくらか積み上げて、恐らく文化勲章はいただけなかったと思っています。個人研究だけでは、あと十年生きて妖怪の本を何冊か出した。でも大したことはできなかった。同じようなことを繰り返すだけで終わったのではないかな。個人研究では、一体どんなことをやってきたのかをお話しするのが、この講演の前半

です。後半は、個人研究では駄目だと。共同研究を始めました。多くの研究者が寄り集まって総合的、あるいは学際的な研究を進めることによって、妖怪研究を新しい学問領域にすることができ、新しい妖怪文化の発見に至ると、そういうお話をしたと思っています。

まずは個人的レベルでお話をさせていただきます。私は学部、大学院を通じて、文化人類学や民俗学を学んで研究者になりました。主な研究テーマは民間信仰や口承説話です。主な調査地は二つです。いろんなところをちょこちょこぞいていても、基本は、四十年やってきたものは、国内では高知県の、現在は香美市になっていますが、旧物部村における民間信仰、いざなぎ流の研究であります。

海外では赤道下の太平洋の小島である、ミクロネシア連邦チューク州ボンナップの環礁での研究です。これは十年ぐらい現地の調査をして、二十年ばかりは行っておりませんが、現地の人たちとはメールでやり取りしております。私が一番お世話になった人は、残念ながら数年前に亡くなりました。このボンナップと旧物部村と、二つの地域が私の調査地であります。ミクロネシアでは昔話・伝説の調査をしておりまして、一冊ぐらい新書を書きたいと思っておりますけれども、その前にいざなぎ流の成果をまとめなければならぬので、まずはそれを先に進めており

ます。私は学部時代に文化人類学実習において、秩父の山奥の旧両神村の狐憑きの話を聞きました。狐に憑かれたら、それを落とす宗教者として三峰の行者がいると。三峰信仰と狐信仰というものと憑依というものが非常に興味深かったので、そういうものに関する研究、文化宗教史的な研究も興味を持って、大学院に入つて、その方向の研究を進めました。

結局、そういうことを進める中で、大学院の修士課程二年のときに出会ったのが高知のいざなぎ流でありました。私の研究では、その後、妖怪といざなぎ流というのが、コインの裏表だと思っております。いざなぎ流に出会わなかったら妖怪研究もなかったかもしれません。もっと違う昔話や神話や伝説などの研究をしていたかもしれません。

現在多くの若い研究者たち、とりわけ妖怪研究者たちが取り組んでいる、現在のような妖怪研究や廃絶した陰陽道の発掘の研究の新展開のそもそもの発端、原点は、私の初期の研究成果である『憑霊信仰論』（一九八二）という本にあると私は見ております。この本はその当時、私が書いた論文をただ寄せ集めて、そして本にしてもらったものですけれど、振り返ってみると、その後の展開を考えると、ああ、そうだなと自分でも思うところがございます。

ただ、最初に出した出版社がすぐつぶれてしまったの

で、別の出版社から若干増補をして、「妖怪研究への試み」という副題を付けました。これが初版出版から二年後です。そして、その十年後にこの本は講談社の学術文庫に収まりました。学術文庫版の解説を佐々木宏幹先生が書いてくださった。非常に良い解説で、今でも佐々木先生の言葉を思い出すときには、この解説を読み返しております。もしも機会がありましたら、読んでいただければ幸いです。

憑依と山姥と
付喪神と百鬼夜行図

この『憑霊信仰論』は論文集ですけれども、一つは学部から興味を持っていた憑き物についての論文です。「ツキ」とか「モノ」という言葉、あるいは農山村などに伝わっている家筋をめぐる憑き物筋の問題とか、そういうものについて理論的な考察をしたものでした。

もう一つは、ちょうど調査したばかりでありましたけれども、いざなぎ流についての興味深いところを書いております。この宗教者たちは呪詛をしたり、あるいは呪詛を返したりするために式神を使う。さらにその式神とは何かというと、陰陽道と深くかわっているのではないか、そういうことを書きました。

もう一つは憑依の問題、これはシャーマニズムと関係します。陰陽道とは違った修験道とか密教の宗教者たちは、自分のちの呪術を実現させるために護法を操るということが言われておりまして、護法を操る験



真珠庵蔵『百鬼夜行絵巻』（部分）
伝土佐光信（室町時代）

者、それは式神を操る陰陽師と深い関係があるのではないかと、そういうことを論じたものです。護法童子と呼ばれることが多けれども、童子ではなく動物の場合もあった。狐など護法に当たる。あるいは蛇が護法に当たる場合もあります。

もう一つは、これはいざなぎ流の調査をしているときに、山姥の伝承も聞いたので、山姥をどういうふう理解するかという問題です。それまでの民俗学における妖怪研究の位置づけといえますが、解釈に対しては異議を唱えて、私なりの定義を提供しました。

もう一つは、あまり知られておりませんでしたけれども、何人かのエッセイストや研究者が指摘していた、道具の妖怪の問題を論じたものであります。その後これは付喪神という形で、多くの一般の人たちが関心を持つようになっています。畠中恵さんという方のデビュー作『つくもがみ貸します』は大変興味深いライトノベルでした。私は付喪神のところから「百鬼夜行絵巻」といいますが、百鬼夜行図と呼ばれるようなものが生まれてくる、ということを押測したものであります。

ですから、この『憑霊信仰論』というのは研究者に評価されるよりも、むしろ周辺のな方々が評価してくださいました。例えば栗本慎一郎さん、経済人類学を専門とされておりますが、私と対談したいと言われて『経済の誕生』という対談本を出しました。さら

に昨年亡くなられた民俗写真家、自らも修験者になって写真撮ったりする内藤正敏さんとも対談をして、『鬼がつくった国・日本』という、これも対談の本を出しました。さらに作家の立松和平さんも、私と異界、他界について話をしたいということで、これも対談本となりました。私はそのとき、自分が素朴に考えていることを表現できて、また研究者以外の人たちにも読んでもらえるいい機会だと思つと同時に、若い人たちにもこういう魅力ある研究領域があるということを知ってもらえるということで、ある意味では戦略的に対談をしてきた時期がございます。

荒俣宏・夢枕獯・
水木しげる・京極夏彦
諸氏と対談

さらに、今でもお付き合いのある方ですけれども、私の本を読んで創作意欲をかき立てられたという方がおります。一人は荒俣宏さんです。荒俣さんはヨーロッパのホラーとか、ああいうものに興味があって、日本のものには興味がなかったようですが、それが日本に興味を持ちだして、『帝都物語』という小説を書きました。これは映画にもなったものですけれど、陰陽道がテーマになっていたんですね。

『帝都物語』はいざなぎ流などの知識を反映した作品です。そして一緒に対談をしようというところで、二人で妖怪、面

白いね、安倍晴明、面白いね、陰陽道、面白いね、と意気投合いたしました。日本の密教は山の呪術信仰だけれども、都市の呪術信仰としては陰陽道だ、これから妖怪はもっともつと注目されるべきだ、というようなことを二人で語り合いました。

もう一方は夢枕獯さんです。獯さんは荒俣さんよりちょっと後になりますが、空海に非常に興味を持っていた、『魔獣狩り』という、空海伝説を踏まえた小説を書きました。空海は今も生きていてという、それなら空海の体の中頭の中に入ったろうなんだろうかというような小説ですね。さらに、もう一つ、陰陽道というのがあるということで、『陰陽師』という小説を書き、この小説はそれほど注目されなかったけれども、これに基づいた岡野玲子さんのコミックが評判になりました。それから水木しげるさんです。水木さんは『憑霊信仰論』を読んで、私と対談したいと言つてこられた。これから妖怪は減っていくんだろうか、どうなんだろうかというようなことを話し合いました。私は水木さんに、これから妖怪画をたくさん描いてください、水木さんの漫画に登場する鬼太郎が退治したような妖怪を全部描いたら、大変な妖怪画集になるでしょうと。そのとおり、水木さんは岩波新書カラー版で『妖怪画談』という、妖怪図鑑を出しておられます。もう一方、やや遅れて京極夏彦さん、今は有名ですけれ

ども、その頃はデザイナーで、私の『憑霊信仰論』を読んで小説家になりたいと思つたという方です。「姑獲鳥の夏」という小説を書きました。大変に厚い本を半年で書き上げたという。それを持っていろいろな出版社を回ったところ、講談社が出してくれたと言っております。

ということで、若い頃からいろんな対談をして、『妖怪草紙』という本には、若い荒俣宏と若い小松和彦が楽しげに対談している写真も残っております。こうした対談の余波はいろんな形で表れました。その十年後、あるいは二十年後には陰陽師、安倍晴明、式神ブームが訪れ、コミックになり、映画になり、あるいは聖地巡礼みたいなものも起きました。さらに水木しげるブームも起きました。水木さん関連の妖怪展覧会が開かれ、多くの人々を集めるようになります。

さらに、こうした現象を支える動きでしゅうか、妖怪ブームが起き、妖怪画の発掘と出版、妖怪による町おこし、あるいは妖怪コスプレまで起きるようになって、今では大きなうねりになっております。こういう動向について、私の研究を、ある意味では震源地にしながら広がっていったのではないかと、というのが若い研究者たちの指摘するところでもあります。

（以下次号）
二〇二六年二月二十六日
於、東京グランドホテル

編集後記



藤木隆宣

宗務庁の教化部（曹洞宗社会福祉連盟）から左のようなポスターが送られて来ました。ちょうど年忌法要があったので、お経の後の法話の材料としてこのポスターを使わせて頂いた。故人の三回忌ということで、お参りはご遺族の夫婦に娘さん二人、連れ合いの方お一人。まず故人と私との生前の関わりをお話して、そのあと私の感じている世相の話となりますが、修証義の

「四摂法」の説明に、このポスターが大いに手助けをしてくれたわけです。「あなたが微笑むと、ここが一番あなたたかい場所になる」我々一人一人が、あたたかい場所になりたいものです。家庭で、職場で、地域社会で、学校で、友達の中で、今はこの事が無くなっている、あるいは薄くなっているのではな

かと思えます。一人一人が「あたたかい場所」にならないといけないのになっていかないのが今の時代だと思います。我々僧侶の世界も危ういなと感じます。まずは私たちの世界から直していかねば、説法もできません。このポスターは「四摂

法」をお話するのにとても役立ちました。教化部の皆さん、次回の企画も期待していますよ。

十月も二十日を過ぎると、落葉が多くなります。私のところは風が吹くと吹きだまりになって、とくにけやきの落葉がひどく、ひと月くらいは掃き掃除に忙しい毎日です。中高一時代を思い出します。懐かし、掃き掃除を終えた時は何かすがすがしい気分があります。ですが、わが中高生時代は掃き掃除を終えて、さあ朝ごはんとなると、これも自分が作っていましたので、ひと息継ぐ間もなく朝ご飯の用意をしていました。それでも、この経験が今の自分を支えているなと感じます。大変でしたが、今では感謝です。

あなたが微笑むと、ここが、一番あたたかい場所になる。

そのやさしさが、誰かの安心になる。
そのやさしさが、この場所をあたたかくする。
そのやさしさが、私たちの誇りです。

ありがとうございます。
あなたの仕事。

福祉の心

布施 思いやりの手が、安心を生む。
愛語 やさしい言葉が、心をつなぐ。
利行 その行動が、誰かを支える。
同事 ともに歩むことが、力になる。

支える人を、支える社会へ。

曹洞宗社会福祉連盟

ある方と少し長話をしました。お寺の後継者不足と、そのお相手探しの話です。私は昭和四十四年の見合い結婚で

した。その頃は見合い、恋愛と事情によって違いますが、多くの同安居達がそれぞれの家庭を築き今に至っています。読者各位も同じことを感じておられると思います。今は後継者、お相手探し共に、大変な時代になっています。お寺は敷居が高いそうです。ですからご本人が見つけて来ない限り、なかなか難しいという結論でした。

私の小庵永正寺、日庭寺での坐禅会、写経写仏の会、和みの会、精進料理と煎茶の会などで感じることは、皆様はたは安心を求めておられるのだということ。その求め先がお寺なのです。全国のお寺の寺族の方がたは住職が留守の時に、その役目を担っておられる。今後も益々その役目は大きなものがあります。寺族から、檀信徒に請われて、住職亡きあと住職になられた方がいます。元寺族の住職のお経やお話がとてもいいようです。時代は変わりました。女性の住職大歓迎の時代到来です。

一仏両祖の教えを今に伝える
曹洞禅グラフ

2027 彼岸 春号-180

毎月18日観音様の日、知多半島の花の寺「心月斎」には40〜50人の檀家が集まるといいます。御住職と檀信徒の方々、その生き生きとしたお付き合いを取材します。



2027年3月1日 発行

寄附者御芳名（敬称略）

〈児童養護施設〉てまり学園 支援金		
所在地	寺院名／個人名（回数）	金額
神奈川県	青木義次（149）	5,000
神奈川県	青木義次（150）	5,000
東京都	篠原東一	10,000
埼玉県	戸田嘉治	20,000
合計額		40,000

仏教企画通信 支援金		
所在地	寺院名／個人名（回数）	金額
群馬県	祥雲寺	10,000
愛知県	太平寺	20,000
千葉県	清水秀男	20,000
新潟県	龍澤寺	10,000
合計額		60,000

ご支援をいただき
誠にありがとうございます

仏教企画発行（取扱）の刊行物

新刊本『遺教経』解説 ●丸山劫外=著	1,700円★
『修証義』解説 ●丸山劫外=著	1,400円★
葬送のしおり ●長井龍道=著	30円★
〈修証義読本〉生老病死 ●須田道輝=著	500円★
曹洞宗檀信徒經典 ●須田道輝=解説	300円★
〈曹洞宗檀信徒必読〉供養のすべて ●霊元丈法=著	140円★
〈曹洞宗檀信徒必読〉葬儀のすべて ●霊元丈法=著	150円★
俳句随想 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って	500円
観音の咒 大悲心陀羅尼 ●渡辺章悟=著	500円
宗教人類学の地平 ●佐々木宏幹=著	2,300円
仏教人類学の諸相 ●佐々木宏幹=著	2,300円
民族宗教と仏教文化 〈佐々木宏幹先生追悼論文集〉	3,500円

※ 書籍価格はすべて消費税、送料別価格です。（★印のものは部数により割引があります）
※『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。

季刊誌 曹洞禅グラフ

【発行日／年4回】

彼岸-春号	3月1日
お盆-夏号	6月1日
彼岸-秋号	9月1日
正月-冬号	1月1日

【定価：200円／1部】

～9部	200円
10～19部	150円に割引
20～49部	135円に割引
50～99部	130円に割引
100～199部	120円に割引
200～299部	110円に割引
300～499部	100円に割引
500部～	90円に割引

お申し込み

有限会社 仏教企画

〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山 4-2-5

Tel: 042-703-8641 Fax: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

※ご寺院名後の番号（3桁もしくは4桁）がお客様番号（コード）になります。
お申込みは ①ご寺院名 ②都道府県名 ③寺籍番号をお願い申し上げます。